

<実践報告>

## 社会科教員養成におけるオンライン同期型の卒業研究発表会

藤崎聖也 信州大学学術研究院教育学系

### Online Presentation of Graduation Study in the Social Studies Teacher Training Program

FUJISAKI Seiya: Institute of Education, Shinshu University

研究の目的	オンライン同期型で実施した卒業研究発表会に対する学生の反応から、授業に限らない大学教育のオンライン化について考察を試みること。
キーワード	大学生 卒業研究 研究発表 オンライン同期型
実践の目的	卒業研究論文の発表
実践者名	第一著者と同じ
対象者	信州大学教育学部社会科教育コース2～4年生ほか（70名）
実践期間	2021年2月
実践研究の方法と経過	2020年度、国立大学の教員養成課程のうち社会科を主専攻とするコースでの卒業研究発表会を、Zoomを用いてオンライン同期型で実施した。分科会は、ブレイクアウトルーム間を移動する形にした。終了後、発表会について匿名の任意回答で振り返ってもらい、それを分析した。
実践から得られた知見・提言	参加者は移動負担の少なさや資料の見やすさなどの点から概ね満足していたようだが、回線の安定性、相互の顔の見えにくさやそれに伴う質問発信の困難増大を課題と指摘していた。また、満足度や今後のあり方について、卒業研究の当事者である4年生とそれ以外の差が見られた。

## 1. はじめに

2020年度以降、COVID 19の感染拡大防止のため、大学関係者は大半の授業や学会がオンライン化された中で教育・研究活動を進めている。学生は授業が主だが、東北大学 学務審議会 高度教養教育・学生支援機構 教育評価分析センター (CIR) (2020)でも集計されているように、卒業年次生は他学年に比してオンライン授業の経験は少なく、卒業研究が学業の中心となる。

卒業研究については、美馬 (2021)や山田 (2019)などの研究で論考されているが、主に一研究室内での学生の学びが中心である。他方、学科・コース単位での卒業研究発表会は複数研究室で開催されるなど、学会大会に近い性格を有する。例えば、城西国際大学の薬学部での2020年度のオンライン卒業研究発表会では、卒業年次生6年生136名に加え、指導教員、4・5年生など総勢400名程度が参加している (大学プレスセンター 2020)。また、大学のオンライン授業については様々な調査報告がなされているが、城西大学 (2020)などで指摘されるように、講義が少人数化し、演習活動が多くなる科目ほどオンラインがよいとする割合は低くなる傾向がある。そうした活動毎の差異をふまえて大学教育のオンライン化について検討するには、卒業研究のオンライン化についても、研究室単位での活動と複数研究室が一堂に会するような発表会は、別個に検討するのが望ましいと考えられる。本論文は、後者に焦点をあて、2020年度にオンラインで実施された卒業研究発表会に関する事例の1つを、参加者の反応を分析した結果を交えつつ紹介する。

## 2. 卒業研究発表会の概要

対象となる国立大学の教員養成課程での卒業研究論文の提出締切は1月末日 (但し、同日が土日祝日の場合は翌日以降) であり、大半のコース (主に教科毎) はその1~2週間後に卒業研究発表会を実施しているが、2020年度は多くがオンライン化された。その中でも本論文で紹介するのは、社会科を主専攻とするコースでの実践である。ちなみに、4年次指定の必修科目は、本論文のテーマである「卒業研究」、教職課程関係では「教職実践演習」と2度目の教育実習 (2020年度は代替プログラムで対応) の計7単位分のみである (卒業には全135単位必要)。コース必修以外の免許状を取得希望したり再履修が必要となったりする場合に幾分増えるとはいえ、やはり他学年に比してオンライン授業の経験は少なかったと考えられる。

例年20名以上が発表者となり、一人当たりの時間を確保するため、2つの分科会を同時並行している。1発表につき、口頭発表19分、質疑応答5分、次の発表者への交代1分という形式である。当日の司会進行は3年生の各研究室代表者が担うなど、学部2~4年生は原則全員出席する。但し、50km程度離れたキャンパスで共通教育科目を中心に履修している学部1年生、当該コースを卒業して教職大学院に所属するなど関連の大学院生については、情報提供はするが任意参加としている。コースの担当教員は、学生の事情、人数バランスなどを考慮してプログラムを作成するのに加え、卒業研究論文提出締切の翌日

表 1 2020 年度 卒業研究発表会の進行概要

	第 1 分科会	第 2 分科会
9 : 50 ~ 9 : 55	集合, 簡単な確認, BO ルームへの分割	
9 : 55 ~ 10 : 00	分科会毎に進行担当者による説明	
10 : 00 ~ 12 : 05	政治学, 日本史学	自然地理学, 法律学
12 : 05 ~ 13 : 00	昼休み	
13 : 00 ~ 15 : 40	日本史学, 社会科教育学 (公民)	社会科教育学 (地歴), 外国史学
15 : 40 ~ 16 : 00	両分科会終了確認の上 BO ルームを解除し, コース教員による講評	

を提出期限としている 2 ページ分の報告要旨を冊子として集約する。

ビデオ会議システムである Zoom を用いたオンライン同期型となった 2020 年度も, それらの骨子を変えずに実施した。2020 年度の進行概要は表 1 の通りだが, 最初の集合段階での確認と閉会を例年は分科会毎にしていたのを全員合同とした以外は, ほぼ通常通りである。報告要旨集は Google ドライブ上で配布した。

Zoom のアドレスはコース担当教員が設定したが, 分科会については, 複数のアドレスを作成するのではなくブレイクアウト (以下, BO) ルームを 2 室作る形とした。初期設定では, 4 年生の発表者 24 名を 12 名ずつに分けたのに加え, 2・3 年生とコース教員も研究室単位で振り分けた。卒業研究発表者が 2020 年度いなかった経済学研究室の 2・3 年生と教員, 若干名の参加があった 1 年生と大学院生は, 進行の分担や人数バランスなどを鑑みて配置した。尚, 当時の Zoom ではすでに BO ルーム間の自由移動が可能となっていたため, 本発表会でもそのように設定した。

コース担当教員が両 BO ルームをモニターし, 発表の遅延, 順番入替など必要に応じてメッセージを出した。第 2 分科会では, 画面共有がうまくいかず, 進行担当の 3 年生の判断で一部発表順を入れ替えて対処するケースがあるなど, 午前中の発表がやや遅延した。しかし, それ以外はほぼ予定通りに進行できた。

### 3. 発表会参加学生の反応

発表会終了後, 匿名 (任意) で本発表会について振り返ってもらうための Google form に回答してもらった。回答者数と当日出席者数の内訳は, 表 2 に示している。以下, その集計内容を順次見ていく。

#### 3.1 参加者としての満足度

第一に, 参加者としての満足度を 5 段階評価 (「5」が最高, 「1」が最低) した結果を見ると, 2・3 年生は, 表 2 に示すように平均値自体が高めなのに加え, 「2」以下の回答がなかった。4 年生は他学年に比して, 最高評価の「5」をつけている比率が高く, *SD* が大きいなど評価が分かれた。4 年生は, 自身の発表に対する自己評価もしている ( $M=3.53$ ,

表2 参観者としての発表会への満足度

	4年生	3年生	2年生	2~4年生以外	合計
5=非常によかった	5	2	3	0	10
4=ややよかった	1	8	3	2	14
3=普通	7	2	5	0	14
2=ややよくなかった	4	0	0	1	5
1=非常によくなかった	0	0	0	0	0
回答者数	17	12	11	3	43
[参考] 発表会出席者数	24	22	19	5	70
<i>M</i>	3.41	4.00	3.82	3.33	3.67
<i>SD</i>	1.18	0.60	0.87	1.15	0.97

表3 参観者としての発表会への満足度と自身の発表への評価の関係 (4年生)

参観者としての満足度	自身の発表への評価					合計
	5=大いに満足	4=やや満足	3=普通	2=やや不満	1=大いに不満	
5=非常によかった	1	2	1	1	0	5
4=ややよかった	0	1	0	0	0	1
3=普通	2	2	2	1	0	7
2=ややよくなかった	0	1	2	1	0	4
1=非常によくなかった	0	0	0	0	0	0
合計	3	6	5	4	0	17

$SD=1.01$ ) が、表3からうかがえるように参加者としての満足度とは大きな関係はなかった (相関係数は .174)。

### 3.2 オンライン同期型の研究発表会での特筆事項

第二に、オンライン同期型の研究発表会について、特筆すべき「良い点」「良くない点」をそれぞれ任意で記述させた反応である。記述があった人数について、4年生は「良い点」「良くない点」両方が3名に対し、「良くない点」のみが5名だった (表4)。一方、それ以外の学年は、両方が11名、「良い点」のみが3名、「良くない点」のみが1名だった (表5)。満足度の相対的な高低に準じた傾向だといえる。

「良い点」としては、「寒い中の移動が不要」「分科会間の移動の容易さ」「資料の見やすさ」などがあげられた。「寒い中での移動が不要」というのは、卒業研究発表会が2月上旬開催であることならではの意見といえる。気候に関しては、COVID 19以前の学会大会でも台風による一部中止 (例えば、日本経済学会 2019) などが課題となっていた。後述する回線環境の不安定さが懸念される代わりに、気候や感染症などには左右されにくいというオンライン方式の特徴を再認識する機会になったといえる。加えて、移動に関しては、

表4 4年生によるオンライン発表会の特筆事項

良い点	良くない点
<ul style="list-style-type: none"> <li>発表画面が近いので見やすい。</li> <li>参加者は聞いている時ミュートにしているため、発表者の発表がよく聞こえて集中できる。</li> <li>自分の興味ある研究にスムーズに移れる点。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>ネット環境のトラブルで、スムーズにいかないことがあった。</li> <li>機器トラブルに弱い。</li> <li>みんなはどんな顔をして自分の発表を聞いているのか、反応がわからないこと。</li> <li>進行速度が通信状況に左右されやすいこと。</li> <li>回線が不安定だと聞こえないことがある。</li> <li>発表中、聞き手の反応が見られないこと。</li> <li>要旨集が紙媒体で手元になかったこと。パワーポイントのノート機能を含め発表者ツールも全て見えてしまうところ（オンライン同期型というよりもzoomの仕様の問題かもしれません）。</li> <li>通信環境次第で大きく変わってくる点。発表時、画面が悪くなってしまい、思うように発表ができなかった。</li> <li>質問や聞きたいことなどが、より出しづらいうところ。</li> </ul>

表5 4年生以外によるオンライン発表会の特筆事項

良い点	良くない点
<ul style="list-style-type: none"> <li>寒い日に暖かい格好と環境で参加できること。</li> <li>好きな時間に好きなタイミングで好きな研究発表を参観できる点。</li> <li>例年、卒論発表会は寒くて防寒をしていかないと大変だったが、今回は暖かくして参加することができてよかった。</li> <li>スライド等を感覚的に用いることで、よりわかりやすい発表が行われていたと思う。</li> <li>お互いが協力して進めている感じがあって、無事終えられて良かった。オンライン同期型でもできるということ。</li> <li>第一分科会と第二分科会の行き来がしやすかった事。</li> <li>部屋を行き来しやすい。</li> <li>参加しやすかった。</li> <li>興味のある発表のある部屋に自由に参加することができた。</li> <li>資料の管理をしやすいこと。</li> <li>資料が見やすいし、発言もしやすい。</li> <li>移動時間等の言ってしまうは無駄な時間を削ったことで、発表会に集中できたこと。</li> <li>発表者のじゃまをせずに自由にルームを移動できる点。</li> <li>ブレイクアウトセッションで進行されるため出入り自由で、特に出入りの迷惑がなくできる点。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>質問時間の沈黙。私が発表者側だったら嫌だ。</li> <li>接続の不具合、質問や交代など話者の入れ替わり時の時間ロス。</li> <li>タイムキーパーがしにくい。</li> <li>オンラインということをやや参加意識が薄れがちだったのか、質問意見があまり活発に出なかった。</li> <li>画面を見すぎて気分が悪くなった。質問しづらかった。</li> <li>質問や意見などが出しにくい雰囲気になってしまったこと。</li> <li>聞いている人の顔がみえない。発表の一方通行感。</li> <li>回線等のトラブルがおこった時の対応が大変そうだった。初めの方が時間が10分ほど押していて、時間設定をきちんと理解できていないような様子がみられた。本人の可能性もあるかもしれませんが…</li> <li>参加者それぞれのネット環境によって進行に影響が出てしまうこと。目に負担がかかってしまうこと。</li> <li>参観者同士の顔が見えず、質問等がなんとなくしにくい雰囲気になったこと。</li> <li>1度や2度ではなく発表者・視聴者の両方に接続の不具合があり、しばしば画面が固まって話が飛んでしまったこと。</li> <li>質疑応答をより活発にできるようなシステムがあると、発表者にとっても、聞き手にとってもより有意義な時間になるように感じた。</li> </ul>

前述の通り遠隔地であることなどから例年 1 年生の参加はほぼ皆無だが、2020 年度は全員途中入退出だったものの 3 名が参加した。「分科会間の移動の容易さ」については、例年現地で部屋を移動する際は、発表の妨げにならない静穏な入退出を進行担当者が呼び掛けていた。オンライン開催では、自分の発言時以外ミュートにしておけば、その配慮はほぼ必要なくなる。加えて前述の通り、分科会毎にアドレスを作らずに BO ルームでの移動としたことも、移動コストの低下に資したと考えられる。但し、これはホストの問題だが、BO ルームのウィンドウを閉じる毎に自由移動設定のチェックボタンが消える点には注意が必要である。最初にこの設定をホストとして利用した 2020 年 12 月の「教職実践演習」コース別成果発表会の際は、学生からの指摘を受けて休憩時間に対応した。本会では分割直後に気付いたため、すぐに一旦解除して対応した。アドレスを複数作るより分科会間の移動が簡易になることや移動前に各ルームの在室者を確認でき安心感があるというメリットから、日本教育工学会（2021）の 2021 年秋季大会のポスター発表でもこの方法が用いられるが、Zoom の設定が変わらない限り、運営にあたってはホスト担当者が忘れないようチェックリストに含めるなどの対応が必要だろう。

他方、「回線環境次第で不安定」「聴衆の反応が見えない」「質問が出しにくい」などの意見が「良くない点」としてあげられた。これらは、例えば日本地震学会（2020）の 2020 年度オンライン大会へのアンケート結果でも指摘されている。学会の研究者でもオンラインでの質問に難しさを感じているので、学会への参加経験が皆無に近い学部生にとっては一層障壁が高い。加えて、表 1 に示したように社会科自体、様々な学問分野を背景としており、研究室毎の内容・方法も多様であることも、自分の所属研究室以外への質問を困難にしている。そのため、例年から進行担当の 3 年生あるいはコース担当教員が会場の状況を見て質問役になるという対応をとっていた。オンラインで顔が見えにくい分、元来の課題が強調される形となったといえる。要旨集を可能な範囲で事前に読んでコメントを考える「予習」が一層重要になる。

### 3.3 感染症対策が不要になった後の形態

第三に、感染症対策が不要になった後の発表会の形態希望である（表 6・7）。どの学年でも「対面の口頭発表」を 1 位とする回答が最多だが、4 年生は有効回答の 8 割なのに対し、それ以外の学年は半数にも満たない。加えて、4 年生は「対面でポスター」という形式に他学年比で多くの支持があるなど、対面志向が強い。また、2 年生は、例えばオンライン同期型のポスター発表に他学年比で支持が集まるなど、回答に多様性があることもうかがえる。専門科目が本格開始し最も多くオンライン授業を体験した学年だったこと、また 1 年次には「教職実践演習」含めコースでの複数学年交流活動に参加していない故にそれまでの対面を中心としたあり方を知らないことが要因とみられる。

また、ハイブリッド方式にも一定の支持が集まっている。ここでは、「卒業研究口頭発表予定の 4 年生（とコース教員）のみ現地、その他はオンライン参観をする」という方式としている。3・4 年生の支持が強めなのは、2019 年度までに対面開催を経験しているため、

表6 感染症対策が不要になった後の発表会の形態（集約版）

	4年生			3年生			2年生			2~4年生以外			合計		
	1位	2位	3位	1位	2位	3位	1位	2位	3位	1位	2位	3位	1位	2位	3位
対面の口頭発表	12	1	1	5	0	2	4	0	2	2	0	1	23	1	6
対面のポスター発表	1	6	4	0	1	2	2	3	0	0	0	1	3	10	7
卒業研究口頭発表予定の4年生（と コース教員）のみ現地、その他はオ ンライン参観をするハイブリッド型	1	4	6	2	7	1	2	1	2	0	2	0	5	14	9
オンライン同期型の口頭発表	0	4	3	3	2	4	0	6	2	1	1	1	4	13	10
オンライン同期型のポスター発表	0	0	1	0	0	2	1	1	4	0	0	0	1	1	7
オンライン非同同期型（オンデマンド）	1	0	0	1	1	0	2	0	1	0	0	0	4	1	1

（注）順位間で重複回答があったもの（例：1位と3位に「対面のポスター発表」など）は省いてある（4年生2名，3年生1名）。

表7 感染症対策が不要になった後の発表会の形態（順位付け別）

1位	2位	3位	4年生	3年生	2年生	2~4年生以外	合計
	対面・ポスター	ハイブリッド型	4	0	1	0	5
		オンライン・口頭	1	1	1	0	3
	ハイブリッド型	対面・ポスター	2	2	0	0	4
対面・口頭		オンライン・口頭	2	2	0	1	5
		対面・ポスター	2	0	0	1	3
	オンライン・口頭	ハイブリッド型	1	0	0	0	1
		オンライン・ポスター	0	0	1	0	1
	オンライン・ポスター	ハイブリッド型	0	0	1	0	1
	対面・口頭	オンライン・ポスター	1	0	0	0	1
対面・ポスター	ハイブリッド型	オンライン・口頭	0	0	1	0	1
	オンライン・口頭	オンライン・ポスター	0	0	1	0	1
	対面・ポスター	対面・口頭	1	0	1	0	2
		対面・口頭	0	0	1	0	1
ハイブリッド型	オンライン・口頭	オンライン・ポスター	0	1	0	0	1
	オンデマンド	オンライン・口頭	0	1	0	0	1
	オンライン・口頭	ハイブリッド型	0	2	0	1	3
		オンライン・ポスター	0	1	0	0	1
オンライン・ポスター	オンライン・口頭	オンデマンド	0	0	1	0	1
		ハイブリッド型	1	1	0	0	2
オンデマンド	オンライン・口頭	オンライン・ポスター	0	0	2	0	2



表 8 発表会の形態に関する各項目と学生の経験例

形態に関する項目	学生の経験例
対面の口頭発表	通常の卒業研究発表会. 3・4年生は参観者および進行役として経験.
対面のポスター発表	通常の「教職実践演習」の成果発表会. 3・4年生は参観者として経験. 卒業研究のコース中間発表会も同様だが, 下級生は参加しない.
卒業研究口頭発表予定の4年生(とコース教員)のみ現地, その他はオンライン参観をするハイブリッド型	卒業研究発表会翌日の, 教科教育専修社会科教育分野での修士論文発表会が, 発表者とコース教員のみ現地参加する方式. 学部生は, 2年生3名がオンライン参加.
オンライン同期型の口頭発表	2020年度の「教職実践演習」模擬授業, および卒業研究発表会(本論文の対象実践)で2~4年生.
オンライン同期型のポスター発表	2020年度の「教職実践演習」成果発表会で2~4年生.
オンライン非同期型(オンデマンド)	2020年度の卒業研究中間発表会. Google スライドに電子ポスターを貼り, そのスペースにコメントする形式. 下級生のコメントは少数.

下級生は卒業研究当事者でないにも関わらず寒い中早朝から出る辛さを体感済であることによるものだろう. オンラインと対面双方のメリットを取り入れられ様々なニーズに対応できるよさの裏返しとして, 運営側にとってはオンラインと対面の双方の状況への配慮が必要となるなど労力は大きい(例えば, EXPOLINE 2021). 表 8 に示すように学生はハイブリッド形式の体験が皆無に近い状態であったこと, オンライン授業の経験を積んだとはいえ大半は「受け手」としてのものであり自らが設定・運営する「発信者」としての視点は十分にはないことから, 過大な期待をしている可能性は考慮すべきだろう. 教師になる可能性が高い教員養成課程の学生として, ICT 活用に関する「発信者」の視点は, GIGA スクール構想により子どもの1人1台端末がほぼ前提となる環境下で一層持っておくのが望ましいものだと考えられる. 堀田・高橋(2021)で指摘されているように, 学生は若く「デジタルネイティブ」世代であってもコンピュータ利用に自信があると安易に断定はできないので, カリキュラムの中での対応が必要だろう. 2022年度の教職課程から, 「教育の方法及び技術(情報機器及び教材の活用を含む.)」が「教育の方法及び技術」と「情報通信技術を活用した教育に関する理論及び方法」と分割される(文部科学省 2021)が, 同科目に限らず, ICT 活用に関する学習を各大学でいかに具現化するかが課題となる.



#### 4. まとめ

本論文では、2020年度にオンライン化された卒業研究発表会の実践事例を、それに対する学生の反応と共に紹介した。上記の通り、全般的に4年生とそれ以外の差が顕著である。第一に考えられる理由は、オンライン同期型への「慣れ」である。先述の事情により、2020年度のオンライン授業の経験は、4年生は他学年に比して少ない。第二に、4年生は7割超、それ以外は6割未満という回答回収率の差異にも現れている、当事者としての意識である。卒業研究では4年生は論文作成者、そして発表者として最も主体的に携わる学年である。それが厳しい評価につながるというのは、未体験故に大学の授業に対して高い期待を持って入学した1年生がオンライン授業に低い評価をする(村上ほか 2021)のと同質は近いと考えられる。だからこそ、2・3年生が4年生となった時に、対面にそれほど拘らないなど今回と同様の反応をするとは限らない点には留意が必要であろう。

サンプルは極めて限定的だが、今回の分析からは、大学の学習活動のオンライン化を評価するにあたって、学年ごとの差異は学部のカリキュラムと突合してみる必要性が示唆された。2021年度の著者の授業では、教育実習学年の3・4年生には2年生よりもオンライン授業への志向が強い傾向が見られた。理由記述からは、前後の時間の授業科目との兼ね合いだけでなく、2020年度に実地ではできなかった教育実習をより確実にしたいという意向もうかがえた。これは教員養成課程であるが故の視点といえる。全てへの配慮には限度があるが、立場によって見解が異なることを念頭に置いて授業運営や大学のあり方を考える必要性は、感染症対策を理由としない授業形式の選択が可能になった場合に一層増してくるだろう。

本稿執筆時点で2021年度の開催方式は未定だが、入学してから即オンライン中心という環境で大学の授業を受けている2020年度入学生が当該の卒業研究発表会に本格的に参加する。その影響を含める形で、卒業研究発表会の運営方法や学生からの反応を引き続き検討することを通じて、大学の学習活動のあり方を考えたい。

#### 付記

本論文は、藤崎 (2021) の研究発表を再構成し、詳細に記述したものである。また、JSPS 科研費基盤研究 (C) 21K02601 「文理・教科横断的な情報活用能力育成を経済学で支援する教材開発の基礎研究」の助成を受けた。

#### 文献

- 大学プレスセンター, 2020, 「薬学部6年生がオンラインで卒業研究発表 400人が活発な質疑展開—城西国際大学」, <https://www.u-presscenter.jp/article/post-43820.html>  
(accessed 2021.9.7)
- EXPOLINE, 2021, 「ハイブリッド型オンラインセミナーとは? 良いとこ取りの特徴を徹底解説!」(2021年3月13日付ブログ), [https://www.expoline.jp/blog/about\\_](https://www.expoline.jp/blog/about_)

hybrid-seminar/ (accessed 2021.9.7)

藤崎聖也, 2021, オンライン同期型の卒業研究発表会に対する参加学生の反応, 日本教育工学会 2021 年秋季全国大会 (第 39 回大会) 講演論文集, pp.279-280

堀田龍也, 高橋純, 2021, 次世代型情報活用能力を育成する教員研修・教員養成, 堀田龍也, 山内祐平編著, 「クラウドで育てる次世代型情報活用能力 Google for Education による新しい学び」, 小学館, 東京都, pp.67-90

城西大学, 2020, オンライン講義に関する学生アンケート結果概要報告, <https://www.josai.ac.jp/albums/abm.php?f=abm00048764.pdf&n=オンライン講義に関する学生アンケート結果概要報告 HP 掲載.pdf> (accessed 2021.9.7)

美馬義亮, 2021, 卒研ゼミにおける研究活動概念の獲得, 日本教育工学会 2021 年春季全国大会 (第 38 回大会) 講演論文集, pp.481-482

文部科学省, 2021, 「教育職員免許法施行規則等の一部を改正する省令の施行等について (通知)」3 文科教第 438 号, [https://www.mext.go.jp/b\\_menu/hakusho/nc/mext\\_00030.html](https://www.mext.go.jp/b_menu/hakusho/nc/mext_00030.html) (accessed 2021.9.7)

村上正行, 進藤修一, 田中敏宏, 2021, 大阪大学におけるオンライン授業に対する教員・学生の評価, 日本教育工学会 2021 年春季全国大会 (第 38 回大会) 講演論文集, pp.191-192

日本地震学会, 2020, 2020 年度秋季大会アンケート結果, [https://www.zisin.or.jp/wp-content/uploads/2020/12/2020-SSJ\\_FM\\_Questionnaire\\_Summary.pdf](https://www.zisin.or.jp/wp-content/uploads/2020/12/2020-SSJ_FM_Questionnaire_Summary.pdf) (accessed 2021.9.7)

日本経済学会, 2019, 日本経済学会 2019 年度秋季大会, <https://www.jeameetings.org/2019f/index.html> (accessed 2021.9.7)

日本教育工学会, 2021, 日本教育工学会 2021 年秋季大会, <https://www.jset.gr.jp/taikai39/> (accessed 2021.9.7)

東北大学 学務審議会 高度教養教育・学生支援機構 教育評価分析センター (CIR), 2020, 「全学オンライン授業アンケート」の結果概要, [https://www.tohoku.ac.jp/japanese/studentinfo/education/01/education0100/ed\\_newnormal\\_04.pdf](https://www.tohoku.ac.jp/japanese/studentinfo/education/01/education0100/ed_newnormal_04.pdf) (accessed 2021.9.7)

山田嘉徳, 2019, 「大学卒業研究ゼミの質的研究」, ナカニシヤ出版, 京都府

(2021 年 9 月 7 日 受付)